

ATHENA LIBRARY OF ENGLISH STUDIES

Part 10, Vols 38–41: Art History, First Series

全4巻セット定価(本体78,000円+税)・ISBN 978-4-86340-137-2・B5判

19世紀風刺画の発展

イギリスの出版文化諸相を扱う研究書の復刻。

政治・社会の風刺図画とコミックアートの歴史についての特徴的な業績を集成。

Contents

Volume 38: Graham Everitt *English Caricaturists and Graphic Humourists of the Nineteenth Century: How They Illustrated and Interpreted Their Times* (1886)

ISBN 978-4-86340-138-9・448 pp., 49 pl., ill.

定価(本体26,000円+税)

Graham Everittの著作は、ナポレオン時代から1864年のジョン・リーチの死までの風刺画の歴史を扱い、定評がある。登場する風刺画家は Cruikshank、Robert Seymour、John Doyle、“Phiz”、John Leech、Kenny Meadows、Robert Buss、“Alfred Crowquill”、Charles Bennett、Thackeray、Richard Doyle、John Tennielなど多数。政治的、また社会的出来事とその時代の風刺画家の作品と関連付けて論じられている。

Topics include: definitions of the word caricature; change in the spirit of English caricature and its causes; influence of Gillray and Rowlandson on their immediate successors; gradual disappearance of the coarseness of the old caricaturists; effect of wood engraving on caricature; Napoleon Bonaparte; introduction of gas; re-opening of Drury Lane; American War 1812–1815; invention of the kaleidoscope; Caroline of Brunswick; queer fashions; hollow pretensions of the dandies; Corn Laws; Elgin Marbles; joint stock company mania of 1825; agitation for reform in 1830–32; success of HB’s “Political Sketches”; Irish Coercion Bill of 1833; O’Connell and the Irish peasant; the year of unrest, 1848; the Jack Sheppard mania of 1840; etc.

Volume 39: Frederic G. Kitton *Dickens and His Illustrators* (1899)

ISBN 978-4-86340-139-6・272 pp., 69 pl.

定価(本体21,000円+税)

著者Frederick George Kittonはディケンズ・フェロウシップ設立メンバーの一人で、ディケンズに関する多くの著作で知られる。ディケンズの著作に作品を提供した挿絵画家たちについての研究書として、本書は19世紀最高のものである。当時使用できる資料はすべて用い、当時存命のイラストレーターや子孫へのインタビューも行っており、非常に重要な資料といえる。

George Cruikshank・Robert Seymour・Robert B. Buss・Hablôt K. Browne (“Phiz”)・George Cattermole・John Leech・Richard Doyle・Clarkson Stanfield, R.A.・Daniel Maclise, R.A.・Sir John Tenniel・Frank Stone, A.R.A.・Sir Edwin Landseer, R.A.・Samuel Palmer・F. W. Topham・Marcus Stone, R.A.・Luke Fildes, R.A.・Illustrators of Cheap Editions・Concerning “Extra Illustrations”・Dickens in Art・Index

Volume 40: Arthur Bartlett Maurice and Frederic Taber Cooper *The History of the Nineteenth Century in Caricature* (1904)

ISBN 978-4-86340-140-2・380 pp., ill.

定価(本体19,000円+税)

二人のアメリカ人による著作で、19世紀の西欧世界の政治状況や紛争を題材にしたカリカチュアを概観する内容。イギリスの政治的カリカチュアをそうした世界史的状況の中に位置付ける上で有益な資料。初期のパンチ誌、クリミア戦争、奴隷制度、フランス第三共和制、アメリカの政治キャンペーン、ジャーナリズムの影響、ボア戦争、ドレフュス事件などが取り上げられている。

The Napoleonic Era・From Waterloo through the Crimean War・The Civil and Franco-Prussian Wars・The End of the Century

Volumes 41: J. A. Hammerton *Humourists of the Pencil* (1905)

ISBN 978-4-86340-141-9・174 pp., 9 pl., ill.

定価(本体12,000円+税)

著者John Alexander Hamiltonは大規模なHarmsworth出版グループの傑出した編集者。19世紀後半に活動していた漫画やコミック・アートの画家たちについての広範な総覧になっている。イラストレーションは *Sketch*、*Tatler*、*Graphic*、*Strand Magazine*、*Pall Mall Gazette*などの各誌から採られたほか、著者が独自に依頼した掲載画家の自画像も収録されて興味深い。

Linley Sambourne・Harry Furniss・F. Carruthers Gould・L. Raven-Hill・J. Bernard Partridge・G. R. Halkett・John Proctor・E. T. Reed・Max Beer-bohm・C. E. Brock・Tom Browne・John Hassall・William Ralston・Cynicus (Martin Anderson)・Cecil Aldin・A. S. Boyd・J. A. Shepherd・Starr Wood・A. Chantrey Corbould・Charles Harrison・C. L. Pott・Charles Pears・Hilda Cowham

「イギリス的」なアート—笑いとカリカチュア

新井 潤美 ●中央大学教授

2011年の6月から9月にかけて、ロンドンのテイ・ブリテン(昔のテイ・ギャラリー)で「ルード・ブリタニア(Rude Britannia)—イギリスのコミック・アート」と題された特別展覧会が開催された。会場には17世紀の匿名の風刺画から、現代のアーティストによる写真や映像、オブジェまで、様々な時代、そしてジャンルにわたる「滑稽な」美術作品が展示された。風刺画やカリカチュア、漫画やユーモラスな絵やスケッチはどこの文化でも見られるものであるのは言うまでもない。しかし独特のユーモアのセンスを誇り(イギリスにおいてユーモアのセンスが実際に特に発達しているかどうかは別として、常に「イギリス的なもの」としてユーモアが意識されているのは明らかである)、しかもそのユーモアの重要な部分として、「己の姿を笑う能力」を挙げるイギリスの文化において、カリカチュアや風刺画が「イギリス的なもの」として受け入れられ、発展していくのも不思議はない。「ルード・ブリタニア」のカタログに掲載された、学芸員のマーティン・マイロンのエッセーによると、イギリスではルネッサンスのイタリアに匹敵するような美術家も作品も誕生しなかったかもしれないが、その代わりに、ウィリアム・ホガースやトマス・ローランドソンのような優秀なコミック・アーティストを生み出すことができたという、「イギリスらしさ」についての自負が今でも(事実はどうであれ)通説として残っている。ロンドンには大英博物館の近くに「風刺漫画美術館 Cartoon Museum」も存在し、常設展示の他に、ヒース・ロビンソン、H. M. ベイトマン、ポント、ロナルド・サールなど、イギリスで愛されてきた20世紀の諷刺漫画家たちの作品の展示会が随時行われている。また、例えばデイリー・テレグラフ紙の長寿コラム「ソーシャル・ステレオタイプ」(ヴィクトリア・マサー文、スー・マカートニー＝スネイブ絵)は、「退役陸軍大佐」、「ウィンブルドンのファン」、「オペラ愛好者」、「化粧品店のセールズガール」等、様々な階層、職種、年代のイギリス人のカリカチュアを描いたもので、一連の単行本としても刊行されており大きな人気を博している。イギリスにおいて風刺画やカリカチュアの人気は衰えることがない。

イギリスにおける風刺画、カリカチュアの原点は上に挙げた、18世紀のホガース、ローランドソン、そしてジェームズ・ギルレイと言ったアーティストたちの、辛辣で毒があり、ときにはかなりグロテスクな作品であることは言うまでもないが、19世紀において、『パンチ』、『ファン』などの滑稽誌や、挿絵付きの娯楽雑誌が次々と創刊されると共に、棘や毒が少々弱まっても、より一般的に受け入れられ、家庭でも安心して鑑賞することができるような諷刺漫画や滑稽画を描くアーティストたちが活躍し、イギリスにおけるコミック・アート(必ずしもコミックでないものもあるが)の全盛



期となる。

今回復刻される4冊の本は、こうした19世紀のイギリスの風刺画家や挿絵画家の人物像や作品を、ほぼ同時代の視点から取り上げて論じた、たいへん興味深いものである。Graham Everittの*English Caricaturists and Graphic Humourists of the Nineteenth Century* (1886)はジョンソン博士による「カリカチュア」の定義から始まって、イギリスのカリカチュアが18世紀から19世紀にかけていかに変化していったかを、人々のユーモア感がより洗練されていったという、文化的な要素や、小口木版画がエッチングにとって代わったといった技術的な面にも触れながらとどっていく。当時どのような事件や人物、そしてスキャンダルが風刺画の材料となったかについて、政治や経済だけでなく、文学や演劇、ファッション等、当時の社会のあらゆる面に言及した詳細な解説がなされている。Frederick G. Kittonの*Dickens and His Illustrators* (1899)はその題名のとおり、チャールズ・ディケンズの作品の挿絵画家に焦点を絞ったものであるが、ユーモアたっぷりの文体で、それぞれの画家の個性や特徴、あるいは奇癖を鮮やかに描いていて、たいへ面白く読み物となっている。アメリカ人Arthur Bartlett MauriceとFrederic Taber Cooperによる*The History of the Nineteenth Century in Caricature* (1904)はニューヨークで出版された本だが、ホガースやギルレイから始まり、イギリス、アメリカだけでなく、フランスやドイツなどの風刺画にも触れているので、一つの事件についての様々な風刺画家の視点や特徴を比較することができる。J. A. Hammertonの*Humourists of the Pencil* (1905)は、23人のイギリスの諷刺・挿絵画家の評伝であるが、表紙に「彼ら自身による挿絵入り」と副題があるとおり、各章の冒頭には、そこに取り上げた画家自身による自画像のスケッチが添えられている。また、当時は決して数が多くなかった女性挿絵画家の一人、Hilda Cowhamが取り上げられているのも興味深い。

このように様々な観点からイギリスのカリカチュア、そしてコミック・アートをとりあげた今回の復刻本は、19世紀イギリス(そしてアメリカ、フランス)の貴重な資料としてだけでなく、それぞれの筆者の道德観、政治観なども反映した読み物としても大いに楽しむことができるものとなっている。

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】